

# 対馬海峡を挟んだ日韓新石器時代の交流

廣瀬 雄 一

縄文式土器や韓国新石器時代早期から中・後期の土器が、対馬海峡を隔て朝鮮半島南海岸地域と対馬・九州西北地域から出土している。これらの土器は、日韓交流の歴史を雄弁に語っている。

しかし、同時にこれらの土器はそれぞれの地域の遺跡において、わずか数片しか出土しない場合が大半で、遺跡における在地の土器の出土量に比べると占める割合は極めて低い。このことは新石器時代の日韓交流をより深く解明していくために、「搬入土器の確認が交流の実証」という手法では限界があることを物語っている。

また、不完全コピーのような土器が両地域に相互に発生するが、この背景を水ノ江は土器の視覚的な模範と言語の壁による意思疎通の問題と、直接的な交流の少なさからこの状況を理解しようとしている（註1）。相互の土器の影響を型式学に説明しようとしても、緻密に比較するほど相違点が一層目立ってくる。水ノ江の指摘のとおりこれが今日の研究の現状である。

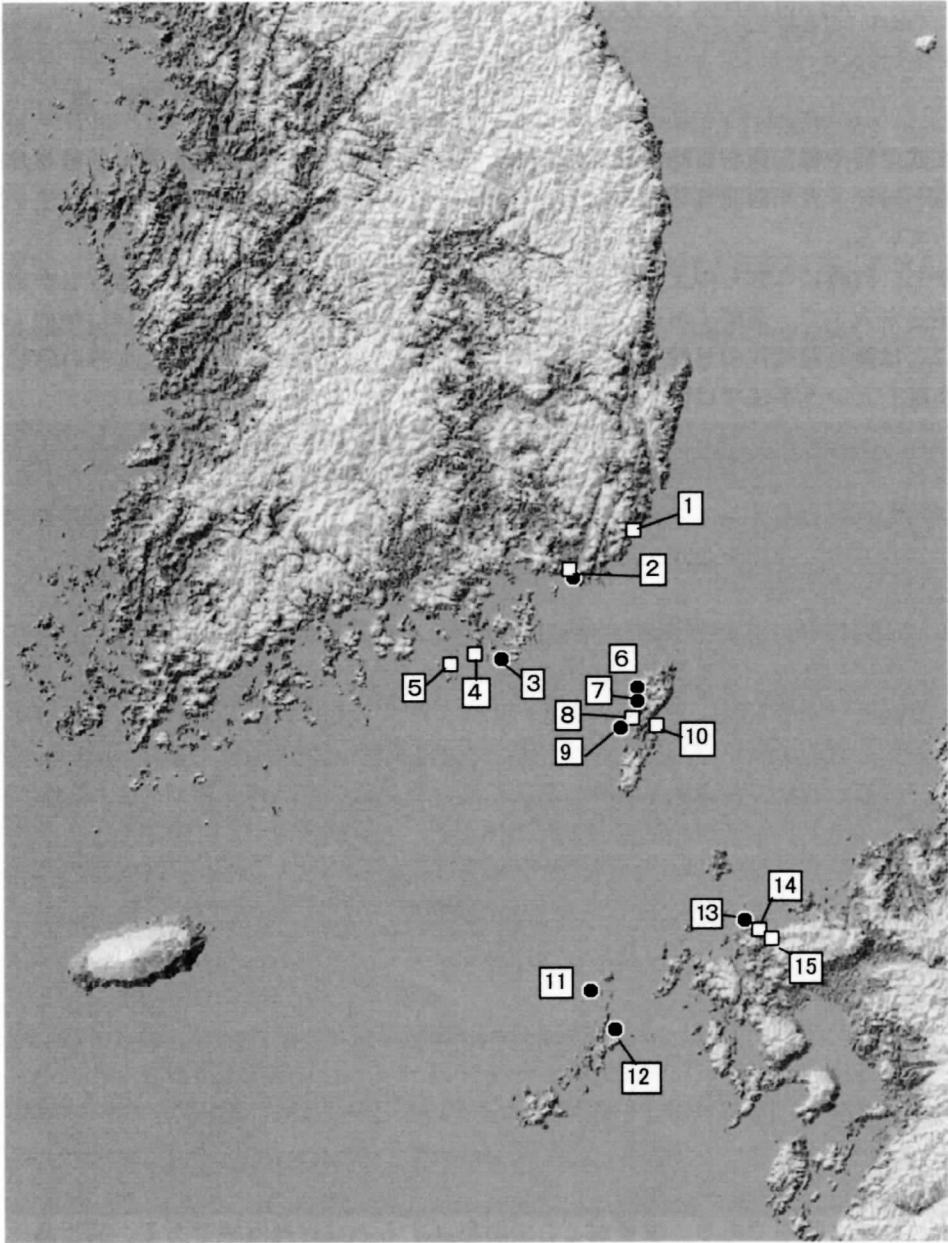
一方、土器以外の石器や骨角器、また、黒曜石などの原石の移動（註2）、貝輪などの装身具にまで比較の範囲を広げ交流の実態に迫ろうとする議論が進められている（註3）。例えば生産具である石器にまで視点を広げれば、縄文中期から後期にかけて石銛や中期・後期の石鋸、石匙や鎌崎型スクレーパーなど石器群の構成の共通性、素材においては伊万里産の黒曜石の朝鮮半島南部地域への流入、装身具においては縄文前期の玦状耳飾など、第二の道具である貝輪装着の風習など共通性などから、両地域での多重的な交流が予想される。

すでに多くの研究者が指摘しているとおり（註4）、対馬海峡を隔てた構造的且つ組織的な交流が存在していたことは異論を挟む余地はない。その交流のあり方については、議論が分かれている。

類似する道具においても、例えば江原道高城文岩里遺跡（註5）では縄文早期から前期前半にあたる隆起文土器の段階に石銛とともに石鋸が出土するなど出現時期が異なるものもあり、貝輪製作でも両地域で詳細にみると違いが認められる（註6）。同一の環境において時代・地域を異なると類似した形の道具の誕生の可能性は常に排除できない。以上の点を踏まえて、今後の議論を進める上で状況の整理してみたい。

まず、地域と時期である。筆者がここで対象とするのは対馬海峡である。済州島一五島列島や、五島一有明海ルートも交流のルートの対象とすべきであるが、これは今後の課題とする。時期は縄文時代早期から後期にかけてであり、旧石器時代にも交流はあったが、縄文時代とは地質学的にも環境がまったく異なる状況であったと考えられる。また、縄文時代草創期から早期前半までは朝鮮半島側の資料がなく議論を進めることは困難である。

なお、草創期から早期前半の資料がないというのは筆者の隆起文土器に関する年代観によるものである。李東注の隆起文土器草創期説は（註7）、石器の製作技術と組成の違い、朝鮮半島東南部においては、梧津里の条痕文尖底土器群が隆起文土器に先行するという状



- |          |          |            |
|----------|----------|------------|
| 朝鮮半島     | 対馬       | 九州島        |
| 1 新岩里遺跡  | 6 越高尾崎遺跡 | 11 野首遺跡    |
| 2 東三洞貝塚  | 7 越高遺跡   | 12 頭ヶ島白浜遺跡 |
| 3 大項浦遺跡  | 8 夫婦石遺跡  | 13 赤松海岸遺跡  |
| 4 煙台島貝塚  | 9 ヌカシ遺跡  | 14 小川島貝塚   |
| 5 上老大島貝塚 | 10 佐賀貝塚  | 15 西唐津海底遺跡 |

第1図 関連遺跡分布図

況、五島列島頭ヶ島白浜遺跡（註8）の轟B2式土器と隆起文土器Ⅲ段階（註9）の共伴例、隆起文の文様と整形の違いから李東注の年代観は成立しないと考えている。

土器の交流について詳細にみてもみれば、縄文早期の条痕文系土器に始まり前期前半の轟式土器から前期後半の曾畑式土器成立以前プロト曾畑、深堀式、西唐津式、野口・阿多タイプ（註10）などと呼称されているこれらの土器群に、朝鮮半島南海岸地域との間に文様や施文技法に類似点が認められることについては、これまで多くの研究者の指摘しているとおりである。

実際にどの程度似ているのかの基準については各研究者によって判断が分かれ、「直接持ち込まれた」と認定できるものから、施文や文様構成・調整の方法が異なり、形や文様を「似せて造ったもの」、また、「偶然の類似—他人の空似—」がある。

「直接持ち込まれた」土器の研究は、木村幾多郎や河仁秀のすぐれた研究があるがこれを筆者なりに整理してみると、縄文前期の前半の段階で長崎県対馬越高遺跡（註11）・越高尾崎遺跡（註12）・五島列島頭ヶ島白浜遺跡、同小値賀島野首遺跡（註13）、前期後半の対馬ヌカシ遺跡（註14）、前期後葉半～中期前葉の対馬佐賀貝塚（註15）、中期～後期前半の対馬夫婦石遺跡（註16）、中期～後期と考えられる唐津市小川島貝塚までは確実であり、同時期の朝鮮半島側では、慶尚南道巨済島大項浦遺跡（註17）で縄文前期の轟B2式土器、煙台島貝塚からは後期の阿高系土器が出土している（註18）。また、釜山東三洞貝塚からは縄文前期後半の曾畑式土器、中期の船元系土器、後期の南福寺式土器などがまとまって出土しており（註19）、朝鮮半島南海岸地域側の交流の重要拠点となっていたと考えられる。

新岩里遺跡（註20）から後期初頭の阿高系土器、ほぼ同時期と考えられる土製耳飾、土偶などが出土し、上老大島貝塚（註21）から中津式系土器（九州の在り型）などが「直接持ち込まれた」土器の確実な例としてあげられる。

「直接持ち込まれた土器」は縄文前期（韓国新石器時代早期～前期に相当）においては、正林護らが積極的に研究を進めている対馬と五島列島、朝鮮半島では南海岸東部の島嶼地域にみられる。地図上ではこれを●の印で表示している。縄文前期における「直接持ち込まれた土器」はさらに二つのグループに分けられる。即ち、対馬越高遺跡・越高尾崎遺跡など朝鮮半島系の隆起文土器のキャンプサイトの性格をもつ遺跡と、五島列島や釜山東三洞貝塚・巨済島大項浦遺跡の場合のように在地の圧倒的な土器の中に数点の土器が混じる遺跡である。この出土土器の比率の違いは、遺跡自体のあり方が異なるために生じていると考えられる。

次の時期、縄文時代の中期から後期（韓国新石器時代中期～後期前半）にかけては、「直接持ち込まれた土器」の量と分布範囲は若干拡大して、遺跡数も増加する傾向が見られる。□の印で表示された遺跡がこれにあたる。

典型的な例としては、釜山の東三洞貝塚や対馬夫婦石遺跡があり、交流の拠点的な集落であったと想定される。この時期、九州島自体には直接持ち込まれた土器として、唐津市小川島貝塚出土の壺型土器と、同西唐津海底遺跡の韓国新石器時代前期後葉から中期前葉にかけて多くみられる口縁部付近から胴部上半にかけて横方向に施文される多歯状工具に

よる密な連続押引をする土器があげられる。

朝鮮半島では、新岩里遺跡など朝鮮半島東南沿岸部まで「直接持ち込まれた土器」が北上し、南海岸地域でも西進の分布範囲が拡大する傾向が認められる。

また、西北九州地域では東松浦半島から唐津周辺にかけて分布が若干広がる傾向がある。この点についてはさらに、佐賀県や長崎県の縄文時代の調査の進展を待たなければならない。筆者は将来の可能性として、九州島においても黒曜石の搬出拠点として、東松浦半島沿岸部や伊万里湾あたりで、東三洞貝塚のような交流の中心拠点の役割を持った集落が存在していたと予想している。

次に、なぜ土器が移動するかを考えてみたい。

土器は人々の移動にともなう調理具として、また、交易品などの入れ物としてもたらされたとされるが、陸路にしる海路しる輸送力の限られている縄文時代においては、移動にともない人間・食料・衣服・装身具・お守り・狩猟具・交換価値の高い加工品の輸送が優先され、日常の容器や調理具としての土器は、運搬の優先順位では下位に位置付けられる性格のものであることは容易に想像される。

交易・交流を前提とした場合、日常使用される土器は安価での入手は可能で、在地の土器でも代用が可能であったろうが、一方において代用のできない性格の土器も存在した。それは、特殊な土器—自己の集団の冠婚葬祭等儀礼のための土器—であり、在地の土器では代用が困難であったと考えられる。

五島列島などから出土する隆起文土器には赤彩された土器があり、これが祭祀のためにもたらされた土器である可能性がある。このように、彩色されたり、精巧で小形の搬入土器に対しては、調理・運搬具の用途としての土器ではなく、これをもたらしした集団の祭祀との関係を考慮する必要がある。

「似せて造った土器」は、搬入土器を模倣してつくったもので、文様帯の構成、調整方法、施文の方法、胎土の選定などで、直接の搬入土器と比較して土器製作の情報の一部欠落が生じているのが特徴である。これを具体的な例として求めるなら、縄文時代前期においては●印の遺跡、中期・後期では直接搬入土器が確認されている□の印の遺跡に認められる。

九州島における前期中葉に位置づけられる西唐津海底出土の刺突文系の土器、朝鮮半島南部地域においては煙台島・新岩里の屈曲型隆起文土器がその典型的な例である。これらの土器を実見する度に感じることであるが、「似る」という言葉を使うように、すでにどこかで、例えば胎土とか文様構成とか調整技法に違和感を覚えているからであり、考古学的にこれをどのような現象に由来するか説明するが必要となる。

これには、土器のイメージ（規範）について考えてみる必要がある。土器の製作しようとする人は、頭の中で記憶しているイメージを組み立てていくという作業を行う。この時、異なる土器を見た経験があれば、土器の文様とか調整方法とかが個々のパーツとして加わる。土器はこれらの新たに付け加えられたパーツを組み立てて完成する。このような経過を経て「なんとなく似ている」折衷型の土器は生まれる。この土器情報の伝達は、物理的・集団間の人的・社会的な距離に反比例し、これが土器の出現率および類似度に反映されていると考える。また、情報の伝達は、陸路と海路の違いも考慮すべきである。丸木舟など

しかし、伝達した情報は常に摂取・活用されたわけではない。紀元前3000年頃と推定されるアワとヒエが出土した黄海道智塔里2号住居跡（註24）、馬山里7号住居跡（註25）、紀元前3360±100のアワと朝鮮半島最古級のキビを出土した東三洞貝塚1号住居址（註26）、中期後半の大同江流域の南京遺跡31号住居址出土のアワなどの例を見ると陸耕の存在は認められても（註27）、堅果類への依存度ははるかに高く、特に漁労的な要素が強い東～東北海岸地域をはじめとして、生業は漁労活動や狩猟・採集が主体となる。

中国大陸では革命的に社会を変革させたアワ・ヒエなどの穀物栽培技術も、朝鮮半島においては伝播した中期の水佳里Ⅰ～Ⅱの段階では、生産サイクルのごく一部の補完的な存在であり、農耕の要素の一部が狩猟・採集社会に一部選択的に取り入れられたに過ぎない。

日本列島における中部山岳地域の縄文中期農耕論の可否はともかく、縄文時代中期以降は獲得した情報を採用してアワ・ヒエを栽培する地域が日本列島のどこでおこなわれても不自然なことではない。情報をどのように活用したかが重要であり、その地域に住む人々の取捨選択、その判断の基底となる文化的な伝統や民族的な嗜好・性質が重要な鍵を握っている。

縄文時代は自然環境に適応した生産サイクルがすでに確立していたために、すぐれた土木技術をもとに土地を開墾する行為を繰り返し、「自然を改造し・自然に挑戦する」といった性質をもつ農耕社会的思考は受け入れられにくく、これが普遍化するのには次の縄文時代晩期～弥生時代を待たなければならなかったと考えられる。

これと同様に、対馬海峡を主要な舞台とした縄文時代と弥生時代との交流の姿は根本的な違いが感じとれる。縄文時代の交流が「海とともに生きる」ならば、弥生時代以降の交流は「海を乗り越える」といった表現が交流の実態を適切に表現しているように思える。

【註】

- 註一 1 水ノ江和同 2000「新石器時代における日韓交流研究の現状と課題」  
『晋州南江遺跡と古代日本』
- 水ノ江和同 2003「朝鮮半島を越えた縄文時代の交流の意義」『考古学に学ぶⅡ』  
同志社大学考古学シリーズⅧ
- 水ノ江2003の指摘は多分に抽象的な議論であるが、交流の実態を構造的に理解しようとした意欲的な論考である。筆者は、言語の不通の指摘については異なる見解を持っている。こちらでも議論を進める上で多分に概念的となるが、以下思うところを若干述べてみることにする。
- 本来、アルタイ語系諸言語の東北アジアにおける分岐を考えた場合、韓国語と日本語の分岐は縄文時代早期～前期前後が想定されるという言語学からの想定があり、現在の日本語と韓国語より距離は近かった。よって、言語の習得は現在より容易であったと推定される。両地域の交流とその仲介は、移住・婚姻等を通して容易に習得された両地域の言語に通じた者が行うもので、物資の直接的な輸送とともに、仲介・通訳等でも中間的利益の獲得が可能で価値のある生活手段の一つであったと思われる。特に対馬や釜山周辺にはバイリンガルの人間が存在していたと考えてよいのではないか。交流の頻度の問題については、本論でふれたい。
- 参考として韓国における6年間の大学における日本語講師としての経験の数値から、韓国女子短大生の本語の日常会話の完全な習得と正確な発音には、最短で6ヶ月間の集中的な教育を必要であったことを付け加えておく。
- 註一 2 西谷正 1982「朝鮮半島の黒曜石について」『賀川光夫先生還暦記念論集』  
坂田邦洋 1982「九州産黒曜石からみた先史時代の交易について」  
『賀川光夫先生還暦記念論集』
- 高橋豊河仁秀小畑弘己 2003「蛍光X線分析による東三洞・凡方遺跡出土黒曜石産地」  
『韓国新石器研究』6
- 河仁秀 2004「新石器時代韓日交流と黒曜石」『韓・日交流の考古学』  
嶺南・九州考古学会
- 註一 3 木村幾多郎1992「貝輪と埋葬人骨」『季刊考古学』第38号
- 註一 4 甲元眞之 1986「櫛目文土器と縄文土器との関係」『韓国美術1 古代美術』  
金元龍編 講談社
- 甲元眞之 1987「先史時代の対外交流」『日本の社会史』1
- 渡辺誠 1988「西北九州の漁撈文化」『列島の文化史』2
- 中山清隆 1989「韓国南部の新石器文化と北部九州の縄文文化」『考古学の世界』
- 木村幾多郎1990「日本出土の韓国系土器と縄文時代」『九州文化研究施設研究発表要旨』
- 水ノ江和同訳 ALBERT MOHA 吉崎昌一 1990「西九州における文化の変遷」  
『古文化談叢』第22集
- 島津義昭 1992「日韓の文物交流」『季刊考古学』第38号
- 安楽勉 1994「対馬における韓国新石器文化との交流」『考古学ジャーナル』376
- 李相均 1995「新石器時代における韓国南岸と九州地方の文化交流」  
『東京大学大学院文学博士文』
- 李相均 2003「新石器時代 韓半島 南海岸新石器群の様相」  
『第5回日韓新石器時代研究会発表要旨集』
- 安承模 1996「韓国先史農耕研究の成果と課題」『先史と古代』7
- 鄭澄元・河仁秀1998「南海岸地方と九州地方の新石器時代文化交流研究」  
『韓国民族文化』12
- 河仁秀 2001「新石器時代対外交流研究」『釜山博物館研究論集』8
- 崔鐘赫 2001「生産活動から見た韓半島新石器文化—中西部地域と東北地方の貝塚遺跡を中心に—」『第4回 韓・日新石器時代学術セミナー発表資料』



- 註一五 国立文化財研究所 2004『高城文岩里遺跡』
- 註一六 河仁秀 2004『東三洞貝塚文化に対する予察』『韓国新石器研究』7  
 河仁秀は東三洞貝塚出土の貝輪を分析した結果、使用する部位と調整により5つのタイプに分類した。日本列島内における整形手法の研究は進展をみず直接の対比は困難であるが、佐賀貝塚資料以外、貝輪の使用部位や調整の方法が異なる点が多いとする河仁秀・木村幾多郎・正林護の九州・嶺南合同研究会2004.7 釜山市立博物館整理室内でのやりとり印象的であった。河仁秀は最後の整形の部分において、それぞれの地域の志向にあわせて加工したとしている。河仁秀は黒曜石の対価として、貝輪が九州島に運ばれた可能性を示唆しており、水之江・山崎が九州縄文研究会2005.2 でコメントしたとおり、日本国内での一層の詳細な調査・研究が待たれる。
- 註一七 李東注 1994「東アジアにおける初期新石器文化について」『考古学論考』18  
 李東注 1999「東北アジア隆起文土器の諸問題」  
 『環東中国海沿岸地域の先史文化』第2編
- 註一八 古門雅高・渡邊康行・荒木伸也1996『頭ヶ島白浜遺跡』有川町文化財調査報告書第1集
- 註一九 廣瀬雄一 1986「韓国隆起文土器の系譜と年代」『異貌』12 共同研究会  
 小原哲 1987「朝鮮櫛目文土器の変遷」  
 『岡崎敬先生退官記念論集 東アジアの考古学と歴史上』  
 廣瀬雄一 1989「韓国嶺南地方櫛目文土器前期の変遷」『考古学の世界』  
 慶応義塾大学考古学民族学研究室  
 廣瀬雄一 1990「韓国隆起文土器の諸問題」『考古学の世界』6 学習院考古会  
 河仁秀 1997「嶺南地方隆起文土器の再検討」  
 『第6回嶺南考古学会発表要会 嶺南地方の新石器文化』  
 廣瀬雄一 1998「韓国新石器時代の諸問題」『研究紀要』第4集 佐賀県立名護屋城博物館  
 隆起文土器Ⅲ段階は隆起文が沈線化した段階で、丸底化が進行する段階、この段階ですでに刺突文系土器南海岸地域にも影響を及ぼしている。上記の筆者の4編の論考の段階では、隆起文土器の後に刺突文土器が始まるとしていたが、直線的な変遷ではなく、隆起文土器Ⅲ段階と段階にはすでに刺突文系土器の影響が認められる。
- 註一〇 久留米市教育委員会 1979「野口地区の調査」  
 『東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査概報』  
 松岡史・森醇一郎 1981「佐賀県西唐津海底出土の縄文土器 曾畑式土器を中心に」  
 『考古学ジャーナル』188  
 田中良之 1982「曾畑式土器の展開」『末盧国』  
 田島龍太 1982「菜畑遺跡縄文時代前～中期の土器群の編年と様相」  
 『菜畑』唐津市教育委員会  
 渡邊康行 1983「第Ⅲ群土器について」  
 『長崎市立深堀小学校無効者増築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』  
 水ノ江和同1987「西北九州における曾畑土器の出現」『古代学研究』117  
 水ノ江和同1993「北部九州の曾畑式土器」『考古学ジャーナル』365  
 曾畑式土器の研究史については、水ノ江和同1987・1993が詳しい。筆者は西唐津出土の土器は、西北九州に限られた地域的な土器であり、長崎県と佐賀県東松浦半島～唐津市を中心として地域の編年研究が必要であると考えている。
- 註一一 坂田邦洋 1978『韓国隆起文土器の研究』
- 註一二 坂田邦洋 1978『対馬越高尾崎における縄文前期文化の研究』
- 註一三 塚原博 2003『野首遺跡 野崎多目的ダム建設に伴う発掘調査』  
 長崎県北松浦郡小値町教育委員会  
 野首遺跡では、対馬でみられるような隆起文Ⅰ～Ⅱ段階の土器、隆帯文土器・隆起文Ⅲ段階

の土器およびこれに類似した土器がみられる。

- 註-14 坂田邦洋 1978「対馬ヌカシにおける縄文時代中期文化」  
『別府大学考古学研究室報告』第1冊
- 註-15 正林護他 1989『佐賀貝塚』峰町教育委員会
- 註-16 長崎県教育委員会1992『長崎県埋蔵文化財報告Ⅴ』長崎県文化財報告書第104集  
長崎県教育委員会1994『長崎県埋蔵文化財年報Ⅰ』長崎県文化財報告書第113集  
安楽勉 1994 註-4文献
- 註-17 李ヒョンジョン・河仁秀・金ヨンフン2004「巨済島出土新石器時代新資料」  
『韓国新石器研究7』
- 註-18 国立晋州博物館1993『煙台島』Ⅰ
- 註-19 河仁秀 2004「東三洞貝塚文化に対する予察」『韓国新石器研究』7
- 註-20 国立中央博物館1988『新岩里』Ⅰ  
国立中央博物館1989『新岩里』Ⅱ  
釜山大学校博物館1996『釜山大学校開校50周年記念 新石器と古代の文化』
- 註-21 孫宝基 1982『上老大島の先史時代生活』  
金東鎬 1984『上老大島』東亜大学校博物館
- 註-22 宮本一夫 1990「海を挟む二つの地域」『考古学研究』37-2
- 註-23 甲元眞之 2001「東北アジア先史時代の生業活動」『新石器時代の環境と生業』1  
東国大学校埋蔵文化財研究所第1回学術会議  
甲元眞之は、遼東半島で稲作の出現が確認される双駝子文化の影響を韓国の西北地域では紀元前2000年期に遡ることは確実であるとする。
- 註-24 都有浩他 1961『智塔里原始遺跡発掘報告』
- 註-25 卞事成他 1989「馬山里遺跡の新石器時代住居址に対して」『朝鮮考古学研究』1989-4
- 註-26 河仁秀 2001「東三洞貝塚1号住居址出土植物遺体」  
『第4回韓・日新石器文化発表資料 新石器時代の貝塚と動物遺体』  
河仁秀 2004 註-19文献
- 註-27 金用珩他 1984『南京遺跡に関する研究』



## 【祝辞】

正林先生お元気そうで何よりです。ミギョンにとっては長崎のアボジです。韓国にいた時に初めてお会いしたのですが、何千年か前に来た縄文人が間違えて現在にやってきたのかと思いました。そのやさしい瞳には頼もしさを感じました。長崎のアボジは、その時とまったく変わっていません。

たまに電話で、死んでしまったとか、病気になったとか聞かされますが、長崎のアボジの周りには素敵な人がいっぱいいて、私をからかっているのですね。

それでも長崎のアボジに会えるのはとても幸せです。これからもお元気でいらしてください。広瀬の文章は長崎のアボジとその友人、ミギョンと廣瀬自身の思い出をつづったものです。

(廣瀬ミギョン)



廣瀬ミギョン女史（後列左）と正林先生（後列右） 2005年2月9日